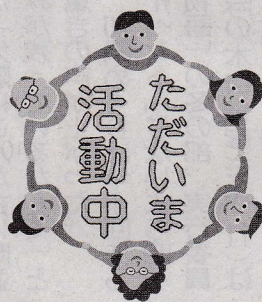


子どもたちの宝物「治療」お任せ



「ボタンを押しても音が出なくなってしまう」。1月15日の午後、日立市会瀬町の福祉プラザに、壊れたおもちゃが持ち込まれた。9人いた「ドクター」の1人が早速、工具を手に「診察」を始める。ひたちおもちゃの病院が同プラザを間借りする形で、「診療所」を開設していたのだ。

認定こども園で働く女性が持ち込んだのは、手押しで遊ぶ新幹線のおもちゃだ。その場で分解して原因を探った結果、内部で断線していることが分かり、はんだごてで修理し、再び組み直してボタンを押すと警笛音が響いた。女性

ひたちおもちゃの病院

(日立市)

は「直らなければ捨ててしまふところだった。子どもたちも喜ぶ」と満足げだ。時間内に修理できない場合は「入院」となる。この日、昨年11月に入院していた犬のおもちゃを、引き取りに来た母親に手渡すことができた。男性メンバー(85)が自宅に持ち帰り、割れていた脚のパーツを手近なプラスチック板で自作して修理した。「直った

おもちゃを渡す時、子どもたちもみんない顔をしてくれるのがやがいの一つ」と男性は語る。

ひたちおもちゃの病院は2003年に設立された。初代院長の小林勇作さん(故人)が、ボランティアでおもちゃを修理する日本おもちゃ病院協会(東京都)の活動を知り、定年退職後のシニアが集まる地元の市民活動団体から有志



工具を使って持ち込まれたおもちゃを修理するメンバーたち

を募ったのが始まりだ。当初は修理依頼が少なかったが、市のイベントへの出張などで活動が知られるようになった。17年は177件の依頼が寄せられ、「完治率」は93%。現在は市内6か所毎月1度ずつ診療所を開く。メンバーも増え、地元の日立製作所OBなど70、80歳代の19人が活動中で、市外からの参加者もいる。

2代目院長を務める山本三男さん(76)も日立製作所OBだ。退職後、家にいるのに退屈していたところで活動を知ったという。これまでおもちゃの修理経験はなかったが、メンバー間で情報交換して日々技術を向上させている。「直せると達成感を味わえるし、少しは社会貢献ができていくのかなと思う」と笑顔を見せた。(山波愛)

リサイクル意識育む

日本おもちゃ病院協会は1996年に全国的に組織化されたボランティア団体。壊れたおもちゃを原則無料で直すことで、愛用する子どもたちに喜んでもらうほか、物を大切にするリサイクル意識の定着を目指す。

1月現在、45都道府県各地におもちゃ病院が開設され、会員数は約1400人に及ぶ。県内では、取手、筑西市など県南、県西地域を中心に11市町で活動中だ。



ひたちおもちゃの病院で活動する主なメンバーたち

同協会では修理方法を指導する「ドクター」の養成講座を開くほか、協会ホームページでおもちゃ修理の手順を紹介している。